

## 「国際フィールドワーク入門」の授業開発

著者	本弓 康之, 今野 良祐, 加藤 敦子, 渋谷 場介, 建元 喜寿, 岡 聖美, 小林 美智子
著者別名	Honkyu Yasuyuki, Konno Ryosuke, Kato Atsuko, Shibuki Yosuke, Tatemoto Yoshikazu, Oka Kiyomi, Kobayashi Michiko
雑誌名	研究紀要
巻	52
ページ	69-70
発行年	2015-09
その他のタイトル	Development of "Introduction to International Fieldworks"
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00144532">http://hdl.handle.net/2241/00144532</a>

# 「国際フィールドワーク入門」の授業開発

本弓康之 今野良祐 加藤敦子 渋木陽介  
建元喜寿 岡聖美 小林美智子

海外での活動や世界とのつながりを意識させるための宿泊を伴う実習を行った。この取り組みは、本校で行うスーパーグローバルハイスクール（SGH）としての様々な活動を行うための入門的な実習として位置づけ、総合学科である本校の特徴を生かした実習となった。また、この実習で開発した英語でのインタビューは、日本国内で日本語を話すこともできる英語を母国語とする方へ依頼したため、どの生徒も英語をできるだけ使ってみようという意識や英語学習への学習意欲が高まるなどの効果があった。

キーワード 国際 フィールドワーク 教科間連携 ESD 異学年交流 協働学習

## 1. はじめに

平成 26 年度に本校が文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されたことを受け、学校全体として海外での活動や世界とのつながり等を意識した取り組みが求められている。（例えば、海外での校外学習やインドネシアでの国際フィールドワーク、海外での生徒の活動を促す本校独自の卒業研究支援プログラム、全生徒対象の課題研究等）

しかし、本校に在学する多くの生徒の意識として、海外にある程度興味・関心を持っているが外国語（特に英語）があまり得意ではない（勉強ができない・話せないと考えている）という意識を強く持っているため、実際に海外へ行ってみたい・自分で行動してみたいと考える生徒はそれほど多くない。

そこで、日本国内で世界とのつながりや問題を考え、コミュニケーションツールとしての英語の活用を強く意識し、多くの生徒が自発的に本校で行っている様々な海外での活動に取り組みたいと考える姿勢や将来海外で活動したいという生徒に対するきっかけ作りとなることを目的に、3泊4日の宿泊体験型の実習プログラムを開発した。

## 2. 実習計画

これまで本校が実施してきた宿泊を伴う野外実習「総合地球科学入門」の取り組みの成果として、異学年の生徒が交流させながら学習させるように計画すると、生徒が協力しお互いに主体的に学び合うなど学習効果の高い教育活動を実施できるという本校の研究成果がある。そこで、この研究成果を参考に生徒が海外での活動や世界とのつながりを日本国内で考えることのできるように本

実習を計画した。



図1 生徒による話し合い

また、様々なことがつながっていることを生徒に意識させるため、本実習ではESD（持続可能な開発のための教育）の視点を持って複数の教科（地歴公民科・国際科・外国語科・農業科・理科等）が連携し、さらに、実習地域へ連携（長野県信濃町、C.W.ニコル アファンの森財団）を依頼し地域振興や環境など様々な視点で生徒が実習に取り組めるように、以下のような内容のつながりを強く意識して計画した。

### 様々な視点を持たせる活動

グローバル人材についての講義・演習  
（地歴公民科・本校教員）

世界を意識させる演習  
（元青年海外協力隊員・本校卒業生）

地域（信濃町）の取り組みについての講義  
（信濃町役場 浅原武志氏）

アファンの森見学  
（C.W.ニコル アファンの森財団）

### 英語を使う活動

英語によるインタビュー  
（信濃町在住の英語を母国語とする方）

表1 主な内容

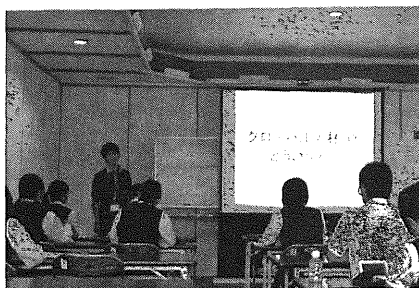


図2 グローバル人材についての講義



図3 世界を意識させる講義・演習

インタビューをお願いした方の助言を得ながら行うなど、話を英語で聞くだけではないような活動とした。



図4 インタビューの様子



図5 インタビューのまとめ作業

### 3. 英語によるインタビュー

英語圏での海外への短期留学やホームステイを行うことは、滞在先で必ず英語を話さなければならないことや生活環境が日本とは大きく異なるなど、英語を学習する上でさまざまな効果があると期待される。しかし、海外に対する意識が低い生徒や英語が苦手だと思っている生徒には、その活動に対する精神的な負担が重く、自分から積極的にコミュニケーションをとることができない場合もある。

そこで、日本国内で英語を母国語とする方に協力を依頼し、日本国内や地域の話題などで生徒とのコミュニケーションが取れるようにしながら英語でのインタビューを行うことで、生徒にとって精神的な負担を減らし自分から積極的にコミュニケーションをとることができるような方法を考え、本実習で行った。

インタビューの方法として

- ① 生徒へインタビュー内容（日本語）の提示
- ② インタビュー内容の英訳
- ③ 英語でのインタビュー
- ④ レポートの作成（英語・日本語）
- ⑤ プレゼンテーション

の手順で行い、②④⑤は異学年の生徒が協同で行うグループ活動で行わせた。また、英語でのインタビューでは、英語で聞いた内容を英語の文章にまとめる作業にもイン

この取り組みでは、生徒が積極的に英語を使おうとする態度が見られ、実習後にも英語が自分の思うように話せなかった・もっと英語を勉強したいという言葉が生徒から聞こえるなど、この取り組みを通して英語学習に対する学習意欲が高まったと考えられる。

### 4. まとめ

海外での活動や世界とのつながり等を学校内での活動（授業・総合的な学習の時間など）だけで、海外にある程度興味・関心を持っているが外国語（特に英語）があまり得意ではない（勉強ができない・話せないと考えている）という意識を強く持っている生徒もいるため、すべての生徒に意識させることは難しい。

しかし、本実習で行ったようにESD（持続可能な開発のための教育）の視点・異学年交流・協働学習などを組み合わせることによって、生徒がお互いに学び合う実習とすることで、英語学習にも効果の高い実習が行えることが分かった。

### 引用文献

本弓康之 他 「総合地球科学入門」の取り組み  
筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第50集